て敵に体当たりする特攻隊員となる運命も担っていました。

いよいよ熾烈を極める戦況のもと、矢吹飛行場から特攻隊「第八十振武隊」が飛びたちました。十二名の若者は鹿児島県知覧基地を経由し、昭和二十年四月二十二日、沖縄の海へ散っています。

昭和二十年になると、敗戦が色濃くなり、本土空襲は激しさを増し、飛行場は攻撃目標として狙われました。こうしたなか、同年八月九日、十日の空襲により矢吹飛行場も破壊され、飛行場としての機能を失いました。昭和二十年八月十五日、敗戦。陸軍の解体と共に、矢吹飛行場はその短い歴史に幕を閉じたのです。

昭和9年10月28日 報国福島号が着陸

昭和12年 矢吹が原に陸軍飛行場が開場 敗戦と共に その役割を終える

**矢吹が原に舞い降りた飛行機は人々の夢や希望のシンボルでした。
昭和12年、陸軍の飛行場として開場した矢吹飛行場。
しかし、次第に激しさを増す戦局は飛行場を悲しい結末へと導き、
敗戦とともに、矢吹飛行場は静かにその役割を終えました。**

Yabukigahara Stories 2
矢吹が原の軌跡